

Eureka X

六年制通信 No.23 令和4年10月28日(金)号

信じること

「あなたにお目にかかりたい。同じ空間で、同じ空気を共にしたい」、「あなたという人がいないのに、時は過ぎる。無情にも過ぎていくことに、私は、いまだに、許せないものを覚えます」これ、恋文ですね。安倍元総理の国葬儀で読み上げられた菅前総理の弔辞の一部です。久しぶりに、これも古い表現ですが、男が男に惚れたという言葉を出し、感動しました。弔辞で菅さんは、焼鳥屋で三時間粘って安倍さんを口説き落としたことを「菅義偉生涯最大の達成として、いつまでも誇りに思うだろう」と言いましたが、これも普通言えませんね。安倍さんと菅さんの友情と信頼は、きっと二人にしかわからないのでしょうか。だって、菅さんも総理大臣になったわけですから、そのことが菅さんにとっては生涯最大の達成ではないですか。でも、そのことよりも、自分が総理大臣になったことよりも安倍さんを口説き落としたことの方が、そして安倍さんと七年八か月あらゆる苦楽を共にしたことの方が「幸せでした」であり、人生最大の誇りなのですね。そんなふうに思える人に、いつか君たちも出会えるといいですね。

いつものように私は政治的なことは言いません。菅前総理の弔辞を取り上げたのは、人を信じるとはどういうことかを考えさせられたからです。

聖書には（「ヨハネによる福音書」第20章）有名な言葉があります。「見ずして信ずる者は幸いなり」です。聞いたことあるでしょ。これは処刑されたのちのイエスの復活を、手のひらの釘の跡など、本当のイエスである証拠を見るまで信じなかった弟子に対しイエスが言った言葉です。見てから信じるようではだめだ、見ないうちから信じるようではなくてはいけない、ということです。そのまま読めばね。割とこの言葉は浸透していてね、人を信じるかどうか悩んでいるときに背中を押す言葉として使われたりします。「見ずして信じる者は幸いなり」というくらいだから信じようよ、そんな使われ方です。しかし、これは聖書の言葉、ましてやイエスの言葉ですから、信仰の問題です。そもそもキリスト教では神を疑っても試してもいけないわけですから、イエスを疑うなどというのは自然な発想です。人間生活においては、疑ってこそ初めて人を信じるに至るということを了解したうえで、神への信仰はそれを越えたところにある、ヨハネ福音書の言葉を私はそう理解しています。

昔、「人を信じてはならないという教育をするのは悲しいことです」という論調がありました。何の話かというと、子どもが連れ去られたり恐喝されたりする事件があると、簡単に人を信じてついて行ってはいけませんと親や教師は教えようとします。当たり前のことと思うでしょうが、しかし、昔メディアでは物知り顔の評論家の皆さん

が、そういう親や教師の姿勢を批判したのです。今はさすがに、そんな目出度い人はいないと思いますが（いるのかな？）。私は、人が人を信じるということは、言葉にするのは簡単ですが、その人の全人格をかけて踏み切る大変な決断だと思います。よく知らない人を信じることができないのは当然で、信じるということはままごとではありません。人の話を聞けば、この人は本気で言っているのかと疑い、新聞でも週刊誌でも本でも読めばここに書いてあることは本当かと疑う、そういう習慣をつけることで人間不信になりはしないかと、私は一瞬たりとも不安になったことはありません。

君たちの生きる時代は匿名という悪意に満ちています。さらに、大人たちはどんどん幼児化しています。幼児化とは物事を白か黒か、100か0かでしか考えられないことを言います。どんなに難しい問題でも「いいね」か「低評価」の二択しか答えようがないようなものです。白か黒か、善か悪か、そういう二択ほど同調圧力を生むものではありません。同調圧力とは自分でちゃんと考えることを放棄させるものです。

私たちの精神は重層的であり、誰もが弱く卑怯な部分と、ややもすると愚行に走ってしまうかもしれないという危うさを心の中に持っています。そこを理解したうえで、長い時間をかけて、お互いの行動に信頼が置けるかどうかを見定める、それが本当の意味で人を信じるということではないでしょうか。

今週のおすすめ

・エーベルス 『蜘蛛』（創元推理文庫）

これは『怪奇小説傑作集5』に入っている一篇です。この傑作集は全5冊で、今は新刊で手に入るようですね。私も老後の楽しみに手元に置いておきたいので、図書館に入れませんか、読みたくなったら来てください。お貸しします。

この短篇ね。けっこう怖いですよ。とあるアパートの一室でお客さんが首をつって死にます。これが事件の発端。同じ部屋で、またお客さんが同じように首をつって死にます。それが死んでいる場所や姿勢も一緒なので、よし、俺が謎を解明してやろうという警官が登場するのですが、ご想像通りこの人も全く同じ死に方をします。しかし、途中で何となく謎が解けたようなことを言うのです。死ぬ前に。読者をじらしめます。最後に医学生が、私とその部屋へ泊ります、と。格安料金になっているから。で、まあ、この人も、これまた想像通りの結末になるのですが、この医学生は非常に詳しい日記をつけていたのです。これが作者のうまいところです。読者は日記を読むことで、この部屋で何が起こったのかを知るという仕掛けになっています。

このアパートの向かいに同じようなアパートがあるのですが、その一室にはいつも窓辺で編み物をしている若い女性がいます。医学生とその女性は目があったり手を振ったりしているうちに奇妙な遊びを始めます。医学生が手を挙げると彼女も同じ仕事をします。複雑な動きをしても完全にコピーして返してきます。医学生は勉強そっこのけで一日中窓辺に座り彼女を見続けます。さて、日記に書かれた謎とは…。その女性の正体とは…。タイトルの「蜘蛛」もこの短篇のプロットを暗示しています。

BGMは 荒井由実 の あの日にかえりたい でした…。